

研究紀要

第17号

2002

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研 究 紀 要

第 17 号

2 0 0 2

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

序

[論文]

- 砂川期の基礎的研究(1)西井 幸雄 (1)
—大宮台地、武蔵野台地、相模野台地を中心として—
- 諸磯式土器の変遷過程.....細山 勝 (29)
- 大宮台地における環濠集落の基礎的研究(1)福山 聖 (61)
—井沼方遺跡—
- 手焙形土器の形と型.....高橋 一夫 (91)
—足守川遺跡群を中心に—
- 埴輪の地域性.....若松 良一 (101)
—紀伊の埴輪のありかたから探る—
- 古代東国と豪族の家.....田中 広明 (129)

砂川期の基礎的研究(1)

—大宮台地、武蔵野台地、相模野台地を中心として—

西井幸雄

要約 砂川期は埼玉県所沢市の砂川遺跡を基準資料として設定された。砂川遺跡は、明治大学考古学研究室によって1966年と1973年に発掘調査が実施され、報告書が刊行されている。

当該期は、後期旧石器の中で、武蔵野台地編年Ⅱb期、相模野編年Ⅳ期前半、諏訪岡段階Ⅵに位置付けられ、ナイフ形石器の最盛期又は終末期石器群として、関東地方の後期旧石器時代研究の中で重要な位置を占めており、1979年と2000年の2回のシンポジウムで議論された。

本稿は砂川期の基礎的研究(1)として、大宮台地・人間台地・武蔵野台地・相模野台地の遺跡を対象に石器集中、遺群の数、石材組成、尖頭器の相伴問題を検討した。その結果、南関東地域を均一な地域としてみるのではなく、幾つかの視点によって区切られる小地域が存在することがわかってきた。

今後は、ナイフ形石器の分析等を行い、南関東地域での砂川期のあり方を検討してゆく。

はじめに

2000年7月、石器文化研究会主催の『砂川—その石器群と地域性』シンポジウムが開催された。筆者はその準備段階から関わり、砂川期の空間的枠組をテーマに発表をおこなった。そのベースになる考えは、1995年と96年に入間川流域の西久保遺跡、坂東山遺跡、屋瀬遺跡の整理作業の際に抱いたアイデアと、それと対比する意味で執筆した「大宮台地の砂川期の様相」(西井 1996)である。また、尖頭器の問題に関しては、1996年に整理に携わった西武蔵野遺跡の槌状剥離を有する尖頭器石器群に関連して考えていたことである。

屋瀬遺跡の報告、シンポジウムの発表に関して田中英司氏(1997)、白石浩之氏(2001)から手厳しいご批判をいただいた。本稿はこの批判に答えるための作業として、再度砂川期をテーマに基礎的研究から始めることにする。

砂川期の研究は、砂川遺跡の編年的位置、砂川遺跡で実践された研究法等多義的である。筆者は、発表要旨の中で前者を取り上げ、関東地域の旧石器編年の構築過程で田中氏の言う「大別編年」と「細別型式」をキーワードに、砂川遺跡の意味を考えてみた。しかし、その作業の中で白石氏が主にテーマとしている「ナイフ形石器の変遷過程」、「茂呂系ナイフ石器の発展過程」に関しては別のベクトルの中で議論してゆかなければならない問題であると考えている。

シンポジウムの発表要旨の中で、問題の抽出とその所在として

- 1、編年の問題
- 2、砂川型刃器技法
- 3、個別別資料の研究手法
- 4、ナイフ形石器の形態の問題
- 5、尖頭器の相伴問題

6. 先刃掻器の共伴問題

以上の6点を列記したが、不十分なものであった。また、上記の6点に加え“研究史の問題”も白石氏の指摘どおり不十分であった。これらのテーマをまとめて議論する能力は筆者に持ち合わせていないので、本稿を基礎研究の1として、分析遺跡の提示と、遺跡の規模と石材組成、尖頭器の共伴をテーマに検討する。

1. 分析対象遺跡

南関東地方中央部から西部にかけて、大宮台地、入間台地、武蔵野台地、丹沢山地、相模野台地、多摩丘陵を対象地域とした(第1図)。⁽⁴¹⁾

大宮台地は宮代町の(1)前原遺跡第1石器集中⁽⁴²⁾、北本市の(2)提灯木山遺跡第2次調査第2文化層、さいたま市の(3)C-26遺跡、伊奈町の(4)久保山遺跡、上尾市の(5)在家遺跡⁽⁴³⁾、前戸崎遺跡、川口市の(7)赤山陣屋跡第1文化層⁽⁴⁴⁾、(8)臥原遺跡⁽⁴⁵⁾の8遺跡とする。石器の出土層位はソフトローム層を中心としており、次の段階となる終末期のナイフ形石器、尖頭器石器群、細石器石器群と自然層による区分は難しい。また、縄文時代の遺構及び包含層の調査中に混じって石器が検出される場合があり、製品のみが単独で報告されている場合もある。

入間台地は鶴ヶ島市の(9)富士見一丁目遺跡⁽⁴⁶⁾、川越市の(10)鶴ヶ丘遺跡C区⁽⁴⁷⁾、入間市の(11)西久保遺跡第1文化層、飯能市の(12)層湖遺跡の4遺跡を対象とする。入間台地は旧石器時代遺跡の調査件数が少なく、基準層位は明らかでないが武蔵野台地北西部とはほぼ共通すると思われる。

入間台地と武蔵野台地は入間川によって画されている。加治丘陵は入間川とその支流の霞川に挟まれた丘陵部で入間市(13)坂東山遺跡は、その北端に位置している。

武蔵野台地の遺跡は、北西部から扇頂部に位置する入間川の支流、霞川の上流域に青梅市(14)城の腰遺跡⁽⁴⁸⁾。狭山丘陵を源流とする砂川堀上流域の所沢市(15)宮林遺跡第1文化層、(16)砂川遺跡、(17)中砂遺跡⁽⁴⁹⁾。下流域の江川の開析谷に面した富士見市(18)打越遺跡第2地点⁽⁵⁰⁾。黒日川上流域の東久留米市(19)多聞寺前遺跡IV中1石器群⁽⁵¹⁾。白子川中流域の練馬区(20)丸山東遺跡第III文化層。石神井川上流域には該期の遺跡が多く練馬区の(21)武蔵岡遺跡⁽⁵²⁾、(22)天祖神社東遺跡第I文化層⁽⁵³⁾、(23)葛原遺跡B地点第I/II文化層⁽⁵⁴⁾、(24)武蔵岡北遺跡第II文化層、(25)高稲荷遺跡第III層下部~IV層上部出土石器とまとまっている。善福寺川源流の善福寺池周辺に杉並区(26)地蔵坂遺跡第III/IV文化層⁽⁵⁵⁾がある。また、神田川水源に位置する井の頭池の周辺は、旧石器から縄文時代にかけて井の頭池遺跡群が形成されており、武蔵野市(27)御殿山遺跡第1地点D区IV層上部石器群、(28)吉祥寺南一丁目遺跡E地点IV上文化層石器群⁽⁵⁶⁾等がある。

武蔵野台地西部は、野川上流域の国分寺市(29)日影山遺跡第2文化層ブロック群I、(30)日影山遺跡第2文化層ブロック群II a・II b⁽⁵⁷⁾、中流域の小金井市(31)前原遺跡第IV中1層文化⁽⁵⁸⁾、下流域の世田谷区(32)廻沢北遺跡第6次調査IV下2層文化⁽⁵⁹⁾がある。以上18遺跡、21地点/文化層を検討対象とした。

中津川上流域丹沢山地に位置する清川村宮ヶ瀬遺跡群は、(33)中原遺跡第V文化層、(34)上原遺跡第V文化層、(35)ザランケ遺跡第V文化層の3遺跡から砂川期の良好な石器群が検出されている。

第1表 分析対象遺跡一覧

遺跡名	石器集中	確 証	配 石	埴 跡	石器総数	ナイフ	尖頭器
【大宮台地】							
1 宮代町前原遺跡	1	0	0	0	約800	12	0
2 提灯木山遺跡	2	0	0	0	365	28	0
3 C-26遺跡	1	0	0	0	128	6	0
4 久保山遺跡	1	0	0	0	222	8	0
5 在家遺跡	10	0	0	0	-	-	-
6 前ノ断遺跡	1	0	0	0	114	4	0
7 水山陣屋跡	2	0	0	0	174	6	0
8 臥原遺跡	9	0	0	0	1,513	52	0
【入間台地】							
9 富士見-下口遺跡	3	0	0	0	193	19	0
10 鶴ヶ丘遺跡C区	1	0	0	0	-	-	-
11 西久保遺跡	6	0	0	0	2,277	33	0
12 厚洲遺跡	1	0	0	0	153	12	0
【加治丘陵】							
13 坂東山遺跡	1	0	0	0	570	14	0
【武蔵野台地】							
14 城の腰遺跡	4	2	0	0	221	12	0
15 宮林遺跡	5	1	0	0	447	22	0
16 砂川遺跡	6	2	0	0	792	48	0
17 中砂遺跡	-	-	0	0	-	-	-
18 打越遺跡	1	0	0	0	84	6	1
19 多聞寺前遺跡	6	5	4	0	319	19	0
20 丸山東遺跡	8	1	0	0	757	65	0
21 武蔵間遺跡	4	0	0	0	166	11	2
22 天祖神社東遺跡	14	0	0	0	2,792	72	1
23 葛原遺跡	15	37	0	0	1,330	81	10
24 武蔵岡北遺跡	5	4	0	0	782	28	5
25 高稲荷遺跡	4	3	0	0	599	29	0
26 地藏坂遺跡	2	2	0	0	135	13	0
27 御殿山遺跡	1	2	0	0	1,669	64	2
28 吉祥寺南三丁目遺跡	-	5	0	0	3,665	301	3
29 日影山遺跡I群	8	1	0	0	193	22	0
30 日影山遺跡II群	15	20	0	0	785	55	1
31 前原遺跡	-	11	0	0	299	41	0
32 廻沢北遺跡	3	0	0	0	308	16	0
【丹沢山地】							
33 中原遺跡	4	0	4	1	260	1	1
34 上原遺跡	36	9	3	3	2,137	129	0
35 サザランケ遺跡	4	0	1	0	592	28	0
【相模野台地】							
36 橋本遺跡	-	10	0	0	2,608	179	2
37 下森鹿島遺跡	16	10	0	0	498	40	6
38 中村遺跡C区	22	7	0	0	1,290	134	5
39 中村遺跡D-F区	21	9	0	0	706	86	2
40 下鶴間長原遺跡	16	26	0	0	4,672	254	8
41 長堀北遺跡	4	12	0	0	470	58	2
42 長瀬南遺跡IV文	27	23	1	1	1,800	127	1
43 長堀南遺跡V文	4	1	0	0	277	20	0
44 深見諏訪山遺跡	3	2	0	0	270	22	7
45 栗原中丸遺跡	56	37	0	0	3,431	219	2
46 南波治山遺跡	1	1	0	0	1,084	81	0
47 福田西二ノ区遺跡	14	0	0	0	643	57	0
【多摩丘陵】							
48 向遺跡	21	19	0	0	631	66	2

相模野台地は、相模川の上流から相模原市の(36)橋本遺跡第Ⅲ文化層(B1からL2)⁽¹⁸⁾⁽²⁰⁾、(37)下森鹿高遺跡第Ⅲ文化層(B1下)⁽¹⁸⁾⁽²¹⁾、(38)中村遺跡C区第Ⅴ文化層(L1S下からB・B2上部)、(39)中村遺跡D～F区第Ⅴ文化層(B・B0～L2)、大和市の(40)下鶴岡長堀遺跡第Ⅲ文化層(L1S～L2)、(41)長堀北遺跡第Ⅵ文化層(L1SからL2上面)、(42)長堀南遺跡第Ⅳ文化層(L2上面)、(43)長堀南遺跡第Ⅴ文化層(L2中部)⁽¹⁸⁾⁽²²⁾、(44)深見源訪問山遺跡第Ⅳ文化層(L2上部からB1上部)⁽¹⁸⁾⁽²³⁾。

相模川の支流、目久尻川の最上流域に位置する座間市の(45)栗原中丸遺跡第Ⅳ文化層(L1H下部)。同じく相模川の支流、引地川中流域に位置する藤沢市の(46)南鍛冶山遺跡遺物集中0401(L1S～B1)、大和市(47)福田西二ノ区遺跡第Ⅱ文化層(B1下部)の10遺跡、12地点/文化層を対象とした。

多摩丘陵は、多摩ニュータウン遺跡群があるが、ここでは町田市(48)向遺跡を対象とした。以上の45遺跡48地点/文化層を対象に分析を行う。



第1図 分析対象遺跡分布図

2. 地域区分

原洞遺跡の報告の中で、砂川期の遺跡が幾つかの小グループに細分できるのではないかと考え、そのアイデアをもとにシンポジウム「砂川—その石器群と地域性」の中で「[砂川]の空間的枠組みをめぐって」として発表要旨にまとめた。

旧石器時代は遊動生活をしており、関東地域程度の範囲は常に巡回する範囲内で、季節などによって中部高地を含めた広範囲移動を繰り返していたという考えが趨勢であるように思える。そうした視点から、筆者がシンポジウムで行ったような小地域区分は、一つの生活圈、行動の一通過点を無意味に区分するだけの徒勞に思われるかもしれない。しかし、考古学的手法として、発掘資料をもとに検討するのであれば、それら資料に対し現在の我々がなぜ幾つかの似たものと、似ていないものにグルーピングできるのは何故かという問題に立ち返るべきであり、また、幾つかの小地域に見えたとして、それを集団の違いと解釈し、抽象的な議論を展開するのは、前者の考えを裏返すだけである。本稿の目的はそこにあるわけではなく、あくまで、当該地域の砂川期の遺跡のあり方をみるのが目的である。

シンポジウムでは石材組成を中心に尖頭器／先刃掻器の共伴、先験的地形区分によって【砂川期：砂川型】【砂川期：武蔵野台地型】【砂川期：栗原中丸型】【砂川期：中村型】【砂川期：多摩丘陵型】【砂川期：大宮台地型】の6グループとした。今回この区分に先立ち、再度地形による台地／丘陵を単位に、遺跡分布図（第1図）をみながら、遺跡レベル（石器集中の数、礫群の有無及びその数、配石等の有無、石器の総点数、ナイフ形石器の数）の検討を進める。

なお、地形区分で注意されるのは、現在の景観と砂川期の景観では、かなり異なっていたことである。砂川の時期^[23]は、海洋酸素同位体によるステージ2の最終氷期最盛期にあたり、海面低下によって東京湾が陸地化しており、中川低地、荒川低地、多摩川低地とも現在の河川面より数十メートルも深く、大宮台地、武蔵野台地、相模野台地はそれぞれ渓谷によって分断されるような景観であったと想定される。そのことによって、人々の行動にどのような制限が加えられたかは不明であるが、現在の台地より、視覚的にメリハリのある単位であったと考えられる。

【大宮台地】

大宮台地は、ローム層の堆積が薄いため砂川期の石器群の殆どはソフトローム層中から出土（西井 1996a）している。調査時に気がつかずに取り上げてしまい、報告書にナイフ形石器等が掲載されている場合も見受けられる。

分析対象とした8遺跡を検討する（表1）。石器集中が複数ヶ所になるのは、在家遺跡の10ヶ所と叭原遺跡の9ヶ所のみで、他は1～2ヶ所と少ない。また、在家遺跡に関しては砂川期以外の石器群が混じっているように思われるので、確実なのは叭原遺跡だけだといえる。礫群は当該地域では伴っていない。

石器総点数は、石器集中の数と連動して叭原遺跡が1,513点と他の遺跡より一桁多い。他に点数がまとまっているのは、提灯木山遺跡の365点でナイフ形石器も28点ある。なお、宮代町前原遺跡と久保山遺跡は黒曜石を用いた石器製作に関わる遺跡で、点数の多くは剥片類と砕片である。特に宮代町前原遺跡の約800点の殆どは微細な砕片で占められている。

当該地域で用いられている石器石材は、遺跡の規模が小さいことと関連するののか、遺跡ごとの偏在が大きい。宮代町前原遺跡と久保山遺跡は黒曜石がほぼ100%を占め、前戸崎遺跡はチャートが81%を占めている。臥原遺跡と提灯木山遺跡は規模が大きくなるため、複数の石材が使われている。臥原遺跡は頁岩系が50%を占め主石材²²⁵⁾となっているが、それ以外にチャート27%、安山岩5%が用いられ、提灯木山遺跡では、安山岩34%とチャート28%を中心に砂岩13%、ホルンフェルス、頁岩系が5%使われている。

【入間台地／加治丘陵】

入間台地は、4遺跡を分析対象とした(表1)。石器集中は西久保遺跡の6ヶ所が多く、他は1～3ヶ所で、雑群は大宮台地と同じく伴わない。西久保遺跡は、石器総点数が2,277点でナイフ形石器33点と石器組成は充実しており、当該地域の中心的な遺跡といえる。屋洲遺跡と坂東山遺跡は西久保遺跡と等距離に位置し、石器集中が1ヶ所であるが、ナイフ形石器が12、14点とまとまっており近似した様相を呈している。石材組成をみると、この3遺跡はチャートを主石材に用いており、それぞれ87、90、98%を占めている。また、黒曜石が殆ど出土していない点も共通する。一方、北東に少し離れた富士見一丁目遺跡は、黒曜石が全体の98%を占めており大きく様相をことにしている。また、富士見一丁目遺跡では上ヶ屋型彫器がまとまって出土している点も注目される。

【武蔵野台地】

武蔵野台地で分析対象とした遺跡は、18遺跡19地点／文化層である(表1)。武蔵野台地は遺跡数も多く、分布の状況から幾つかのグループに分けて検討する。

a) 武蔵野台地北西部、入間川流域

まず、砂川遺跡を中心に狭山丘陵の北部に分布する城の腰遺跡、宮林遺跡、砂川遺跡、中砂遺跡の4遺跡を取り上げる。

当該地域は、入間台地の富士見一丁目遺跡を除いた、鷲ヶ丘遺跡C区、西久保遺跡、屋洲遺跡、坂東山遺跡と約5kmの範囲にまとまり、遺跡群を形成している。しかし、石器集中は4～6ヶ所を数え石器総点数、ナイフ形石器ともに入間台地の約2倍の規模である。また、各遺跡で雑群が小規模であるが伴っている。石器石材はチャートを主石材とする点は共通するが、城の腰遺跡はチャート60%に対し黒曜石38%、宮林遺跡はチャート56%に対し頁岩系が30%、ホルンフェルス9%、黒曜石1%、砂川遺跡はチャート65%に対し凝灰岩27%、黒曜石1%が用いられている。入間川を挟んでチャートを主石材に近似したナイフ形石器がみられる地域であるが、遺跡の規模等、石器石材に違いもみられる。

b) 石神井川流域を中心として

遺跡分布(第1図)をみると、武蔵野台地東部中央に遺跡の密集区がある。南側に野川流域の遺跡が並び、北西側に目黒川流域の多聞寺前遺跡、白子川流域の東丸山遺跡がある。石神井川の富士見池と神田川源流の井の頭池周辺の約3kmの範囲に8遺跡が密集している。

石器集中は大祖神社東遺跡14ヶ所、葛原遺跡15ヶ所と二桁である。その他の遺跡も、地藏坂遺跡を除くと数ヶ所の石器集中が検出されている。なお、前原遺跡と吉祥寺南町1丁目遺跡では石器集中の区分がされていないが、遺物分布図をみるとかなりの石器集中が密集していることがわかる。

また、御殿山遺跡は径約10mの範囲に遺物が密集しており、多くの石器集中が同一地点で重複していると思われる。

礫群は各遺跡で伴うが、特に葛原遺跡で石器集中の2倍以上の数が検出されている。

石器点数は、井の頭池遺跡群の吉祥寺南町三丁目遺跡は総点数3,665点、ナイフ形石器301点と非常にまとまっている。同じ遺跡群の御殿山遺跡においても総点数1,669点、ナイフ形石器64点と多く、当該地域が一つの中核的な遺跡と考えられる。石神井川流域は、天祖神社東遺跡から総点数2,792点、ナイフ形石器72点。葛原遺跡は総点数1,330点、ナイフ形石器81点を数える。

石材組成は、入間川流域の遺跡群のようにチャートを主石材とするような地域的特性はみられず、逆に多様な石材が使われている。個別にみると武蔵関遺跡はホルンフェルスが主石材で69%を占め、他はチャート25%、黒曜石4%。天祖神社東遺跡は黒曜石が主石材で52%、ホルンフェルス28%、チャート15%と続いている。葛原遺跡は報告書に石材組成が明記されていないが、チャートを主に黒曜石等が用いられているようである。武蔵関北遺跡は主石材が黒曜石で66%を占め、他は黒色頁岩19%、メノウ8%と続く。稲荷原遺跡は硬/珪質頁岩（報告書では頁岩とだけ記載されているが、巻頭写真を見る限り良質な硬/珪質頁岩である）が主石材で77%を占め、他に黒曜石が21%用いられている。地藏坂遺跡と吉祥南町三丁目遺跡、御殿山遺跡は半分を占める主石材はみられない。地藏坂遺跡はチャート34%、粘板岩22%、頁岩系15%、凝灰岩11%。御殿山遺跡はチャート20%、頁岩系18%、黒曜石13%、凝灰岩12%。吉祥南町三丁目遺跡は黒曜石41%、凝灰岩20%、頁岩系15%、チャート11%と複数の石材が多量に用いられていることがわかる。

本地域の石器石材の特徴は、各遺跡とも黒曜石が一定量を占める、他にも遠隔地石材と思われる硬/珪質頁岩等が集中的に利用されている遺跡がみられる。また、吉祥寺南町三丁目遺跡から相模川産と思われる凝灰岩がまとめて出土しており、相模野台地との関連性も注意させる。地理的には武蔵野台地東部は石材採集地点と距離があり、かえって入間川流域のほうが採集地に近いように思えるが、石材組成をみる限り逆で、入間川流域のほうはチャート等の在地石材に依存し、当該地域のほうが遠隔地石材を多用している。

c) 野川流域

野川流域は研究史的に重要な位置を占める遺跡が多いが、今回は上流域の日影山遺跡、中流域の前原遺跡、下流域の廻沢北遺跡の3遺跡4地点/文化層を対象とした。

野川上流域の日影山遺跡は、層位による若干の差と、遺物分布、石材、ナイフ形石器の形態等からブロックⅠ群とブロックⅡ群に分離し、ブロックⅠ群をナイフ形石器の終末期に位置付け、ブロックⅡ群を砂川期としている。以後ブロックⅡ群を検討する。石器集中15ヶ所に対し礫群20基が検出された。石器の総点数は785点でナイフ形石器は55点出土している。本遺跡に関しては隣接地を東京都埋蔵文化財センターが調査し、当該期の遺跡の広がりを確認していることから、かなりの規模の遺跡になると想定される。中流域の前原遺跡は総点数299点、ナイフ形石器41点が検出されている。下流域の廻沢北遺跡は総点数308点、ナイフ形石器16点が出土している。

石器石材は、日影山遺跡ブロックⅡ群は硬/珪質頁岩が34%で最も多く、次いで黒曜石28%、チャート15%の順となり、いわゆる遠隔地石材が占める割合が高い。前原遺跡は粘板岩が71%と主石

材であるが、結板岩という呼称は現在あまり使われておらず、黒色頁岩と々の関係で置換されると思われるが、実資料の検討をおこなっていない。頁岩系が主体を占めていると思われる。廻沢北遺跡は概報であるため全体の組成はわからないが、硬/珪質頁岩（報告書では珪岩と記載されているが、実見した際の記憶では良質な硬/珪質頁岩であったと覚えている）の大形のナイフ形石器が出土している。

以上、武蔵野台地の砂川期の遺跡を概観したが、入間川流域や次に検討する相模野台地と異なり、いわゆる遠隔地石材が多用される遺跡がある。特に国武氏が指摘しているように高稲荷遺跡、日影山遺跡ブロックⅡ群、廻沢北遺跡で硬/珪質頁岩を用いた大形のナイフ形石器がみられる点は注目される（国武 2000）。

【相模野台地/多摩丘陵】

a) 丹沢山地

宮ヶ瀬遺跡群は中津川とその支流が形成する河岸段丘上に立地する遺跡群で、宮ヶ瀬地区と落合地区に区分される。中原遺跡、上原遺跡、サザランケ遺跡は全て落合地区に位置する。落合地区は早戸川西岸の高位段丘が連続して分布する地域で、それぞれの遺跡は沢によって分断されているが、隣接している。中原遺跡は石器集中4ヵ所と配石4基、炉跡1ヵ所が検出されている。石器の総点数は260点出土しているが、製品はナイフ形石器の未製品1点と尖頭器1点、楔形石器、礫器類だけである。たま、尖頭器は製作段階の調整剥片とされているが、小形薄手の剥片で、尖頭器の共伴の確証に弱いように思える。上原遺跡は中原遺跡とサザランケ遺跡に挟まれた真中に位置し、遺跡の規模等から宮ヶ瀬遺跡群の砂川期の中心的遺跡である。石器集中は36ヵ所、礫群9基、配石12基、炉跡3ヵ所が検出され、石器の総点数は2,137点を数え、ナイフ形石器は129点出土している。サザランケ遺跡は石器集中4ヵ所と配石1基で、礫群は検出されていない。石器の総点数592点、ナイフ形石器28点が検出された。

石器石材は、中原遺跡は黒色ガラス質安山岩が主石材で76%を占め、次に凝灰岩が20%である。上原遺跡は凝灰岩が88%と圧倒的に占めており、他は黒曜石が8%である。サザランケ遺跡は上原遺跡ほどではないが凝灰岩が60%と主石材で、次いで黒曜石29%、チャート5%となっている。近接する3遺跡で、石材消費のあり方が異なっている。遺跡立地から凝灰岩の使用頻度が高いのは想定できるが、黒色ガラス質安山岩、黒曜石と遠隔地又は流域を異にする石材が一定量使用されており、特に中原遺跡では黒色ガラス質安山岩が主石材になっている。それに対し、相模川上流域の遺跡で多用されているチャートが殆ど使われていない点は注意される。

b) 相模川流域

相模川及び支流の目久尻川、引地川流域は砂川期の遺跡が多く、10遺跡12地点/文化層を対象に検討する。（表1）

石器集中と礫群を相模川上流域から順次概観する。遺跡分布図（第1図）をみると橋本遺跡は上流域に位置し、遺跡の密集する大和市周辺の遺跡から北側に離れている。橋本遺跡は石器集中が明記されていないが、遺物分布図を見る限り、調査区の東側に等高線に直行するように多くの集中部がみられる。また、石器集中と重複するように礫群10基と炭化物片の集中が検出されている。石器

の総点数は2,608点、ナイフ形石器179点出土している。

中流域(大和市周辺)の遺跡は、下森鹿島遺跡は石器集中16ヶ所、礫群10基で石器総点数498点、ナイフ形石器40点出土している。中村遺跡は谷を挟んでC区とD-F区に分かれている。C区は石器集中22ヶ所、礫群7基で石器総点数1,290点、ナイフ形石器134点。D-F区は石器集中21ヶ所、礫群9基、石器の総点数706点、ナイフ形石器86点である。長堀南遺跡は石器集中16ヶ所、礫群26基で石器の総点数4,672点、ナイフ形石器254点出土している。石器の総点数では、今回分析対象とした遺跡で最大規模である。また、ナイフ形石器の点数は吉祥寺南町一丁目遺跡に次ぐ数である。当該地域の砂川期の遺跡は、規模の大きい遺跡が多いが、その中でも中心的遺跡であるといえる。長堀北遺跡は石器集中4ヶ所、礫群12基、石器の総点数は470点とあまり多くないが、ナイフ形石器が58点出土しており、石器総点数に比較してナイフ形石器の点数が多い。長堀南遺跡は砂川期の石器群が2枚の文化層に区分されている。第IV文化層は石器集中27ヶ所、礫群23基、石器の総点数1,800点、ナイフ形石器127点。第V文化層は石器集中4ヶ所、礫群1基、石器の総点数277点、ナイフ形石器20点である。深見諏訪山遺跡は石器集中3ヶ所、礫群2基、石器の総点数270点、ナイフ形石器22点と資料数はそれほど多くないが、尖頭器7点とそれに伴う刮片等が出土している点には注意される。栗原中丸遺跡は、久久尻川上流域で大和市周辺の遺跡群からは、やや西側に離れている。石器集中56ヶ所、礫群37基、石器の総点数3,431点、ナイフ形石器219点出土しており、下鶴間長堀遺跡と共に当該地域の中心的遺跡である。福田丙二ノ区遺跡は大和市に所在するが、河川流域は相模川でなく、その支流の引地川上流域に位置している。石器集中は14ヶ所で礫群は検出されていない。石器の総点数は643点、ナイフ形石器57点出土している。南鍛冶山遺跡は引地川下流域に位置する。石器集中は1ヶ所で礫群が1基伴っている。石器の総点数は647点でナイフ形石器57点出土している。引地川の2遺跡から尖頭器が出土していない点には注意される。

石器石材は、橋本遺跡は全体の50%を超える主石材はないが、チャートが49%を占め黒曜石11%、凝灰岩9%である。宮ヶ瀬遺跡群が凝灰岩を主石材としチャートを殆ど用いていないのとは、正反対で凝灰岩の比率が低い、一方で黒曜石が一定量用いられている点は共通している。下森鹿島遺跡の主石材はチャートの53%、次いで凝灰岩18%、砂岩9%、黒曜石5%である。中村遺跡C区ではチャートが最も多く41%、次いで凝灰岩20%、粘板岩19%、黒曜石5%となっている。D-F区ではチャートよりも黒曜石が多く48%、次いでチャート37%、粘板岩10%の順となり、凝灰岩がまったく使われていない。谷を挟んで近接する2地点の遺跡で、石材の異なった嗜好性がみられる点等から、時期差とも考えられる。下鶴間長堀遺跡は凝灰岩45%、粘板岩29%と多く、次いでチャート12%、黒曜石10%が使われている。栗原中丸遺跡は主石材が凝灰岩で52%を占め、次いで粘板岩22%、黒曜石18%、チャート3%となっている。下鶴間長堀遺跡と栗原中丸遺跡は調査時点での石材分類が見直され、他の石材の一部が凝灰岩に再分類されている。そのことを考慮すると凝灰岩の比率はもっと高いといえそうである。長堀北遺跡の主石材は凝灰岩の80%で、次いで粘板岩8%、黒曜石5%、チャート4%の順である。長堀南遺跡第IV文化層は泥岩/珪質泥岩/泥質珪岩を合わせると37%を占め、次いでチャート27%、凝灰岩10%、黒曜石5%となっている。長堀南遺跡第V文化層は第IV文化層と比べてチャートの比率が40%と高くなるが、泥岩/珪質泥岩/泥質珪岩を含

わせると30%になる。黒曜石の5%は第Ⅳ文化層と同じであるが凝灰岩は4%と低くなる。泥岩／珪質泥岩／泥質珪岩は他の報告書であり使われない呼称であるが、頁岩系と理解すると、福田丙二ノ区遺跡とも関連して興味深い。福田丙二ノ区遺跡は凝灰岩44%が最も多く、次いで黒曜石21%、頁岩系22%の順である。本遺跡の特徴として頁岩系の石材が多く用いられている。南鍛冶山遺跡は、殆どが黒曜石で占められており、当該地域としては特異な存在である。

以上、相模川及び支流の日久尻川、引地川流域の遺跡を概観した。石材の嗜好性によって大きく2グループに分けられる。まず、主にチャートを用いる一群で、遺跡分布は中流域から上流域にまとまっている。次に凝灰岩を主体とする一群で中流域から日久尻川、引地川の上流域に分布している。しかし、大和市周辺の約径3kmの狭い範囲に遺跡が密集するなかで、地図上に明確な区分線を引くことは難しい。便宜的に前者をグループa、後者をグループbとして検討する。また、少ないが黒曜石が主体を占める遺跡があり、グループcとしておく。

グループa：チャートを主に用いる遺跡：橋本遺跡、下森鹿島遺跡、中村遺跡C区、長堀南遺跡第Ⅳ／Ⅴ文化層、深見諏訪山遺跡

橋本遺跡以外は、相模川中流域の大和市周辺に分布している。相模川流域の遺跡の印象として凝灰岩を多用しているように思えるが、意外とチャートを多用する遺跡が多い。やや下流側に離れる深見諏訪山遺跡においても、石材組成表は掲載されていないが「相模野台地の当該期石器群の多くは、細粒凝灰岩を多用する傾向があるが、本文化層では、チャートが比較的多く用いられている」（諏訪周・堤 1985）と指摘されている。しかし、チャートが全体の半分以上を占める遺跡は下森鹿島遺跡だけで、凝灰岩と黒曜石が一定量用いられている。

グループb：凝灰岩を主体とする遺跡：下鶴岡長堀遺跡、長堀北遺跡、栗原中丸遺跡、福田丙二ノ区遺跡

下鶴岡長堀遺跡と長堀北遺跡は相模川流域であるが、栗原中丸遺跡と福田丙二ノ区遺跡は支流に分布している。近年石材名称の再検討がおこなわれており、凝灰岩の占める割合は相対的に上がる可能性が高いが、ここでは報告書の記載を使用している。相模川流域の下鶴岡長堀遺跡と長堀北遺跡は凝灰岩の占める割合が45%と80%である。チャートを主体とする遺跡が多様な石材を一定量もちいているのに対し、凝灰岩を主石材とする2遺跡は、黒曜石の割合5～10%とグループaに近似するが、一方でチャートの利用は少ない。

栗原中丸遺跡は下鶴岡長堀遺跡と似た傾向を示すが、福田丙二ノ区遺跡は頁岩系の石材が22%占め、尖頭器の共伴が無いなど、個別の検討が必要である。

グループc：黒曜石を主体とする遺跡：中村遺跡D～F区、南鍛冶山遺跡

本グループはグループa/bと同列には考えられない。中村遺跡D～F区は黒曜石が48%を占めるが、チャートも37%用いられておりグループaに含めて検討するほうが妥当かもしれない。南鍛冶山遺跡は黒曜石だけを用いる遺跡で、本蓼川遺跡と近似している。編年的問題もあるが、入間川流域の富士見一丁目遺跡と合わせて、砂川期の遺跡がまとまる地域から少し離れた地点にこのような遺跡が立地するのは興味深い。また、南鍛冶山遺跡／富士見一丁目遺跡とも黒曜石を多用する為か、ナイフ形石器が小形で幅狭の傾向がある、宮ヶ瀬遺跡群の上原遺跡とも合わせて、ナイフ形石器の

項目で検討したい。

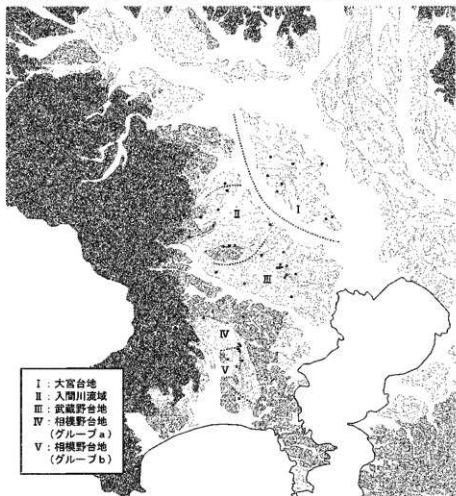
c) 多摩丘陵

多摩丘陵は、多摩ニュータウンと港北ニュータウンによって精緻な調査が実施され多くの遺跡が確認されている。三瓶氏の集成(三瓶 2000)によると36遺跡になるが、今回検討対象としたのは向遺跡のみである。

向遺跡からは石器集中21ヶ所と礫群19基が検出され、石器の総点数は631点、ナイフ形石器は66点出十している。石材組成はチャートが51%を占め、次いで粘板岩20%、黒燧石19%となっている。黒燧石製の尖頭器も出十しており、相模野台地グループaと同じ傾向である。

以上、各地域単位で概観したが、次に全体の整理を行い、シンポジウムでおこなった地域区分と合わせて検討する。

まず始めに、シンポジウムで行った地域区分【砂川期：大宮台地型】【砂川期：砂川型】【砂川期：武蔵野台地型】【砂川期：中村型】【砂川期：栗原中丸型】【砂川期：中村型】【砂川期：多摩丘陵型】



第2図 地域区分図

と、上記で概観してきた各台地と比較すると、【砂川期：大宮台地型】は大宮台地の8遺跡。【砂川期：砂川型】は入間川流域の遺跡で、入間台地の富士見一丁目遺跡を除いた3遺跡と加治丘陵の坂東山遺跡、武蔵野台地北西部の4遺跡。【砂川期：武蔵野台地型】は武蔵野台地の13遺跡、打越遺跡第2地点を含めるかは保留。【砂川期：中村型】と【砂川期：栗原中丸型】は相模野台地の9遺跡、11地点／文化層である。前者をグループa、後者をグループbに対応する。【砂川期：多摩丘陵型】は多摩丘陵の遺跡で、向遺跡のみを対象とした。この区分に含まれない遺跡として、【砂川期：砂川型】に近接して黒耀石を多用する富士見一丁目遺跡、【砂川期：栗原中丸型】に近接して黒耀石を多用する南鍛冶山遺跡と宮ヶ瀬遺跡群が挙げられる。

シンポジウムの要旨では、説明不足もあり筆者が意図したものとやや異なる形になった観もある。また、地域区分で最も偏在が数値化しやすい石材組成をベースに、グルーピングをし、【砂川期：大宮台地型】と【砂川期：多摩丘陵型】は内容の検討より地形区分で遺跡の挿入れを行った。あえてレベルの異なる要素による区分をおこなったのは、固定的なグルーピングが目的ではなく、分析対象（要素／視点）が変われば、異なるグルーピングが可能になり、それによって観えてくるものを検討したいと考えたからである。最初に最小の単位が求められれば、次に再区分に便利かと思っただが、結果は細分の方のみが目立ち、このグルーピングが固定的区分として捉えられる危険を感じた。再度田中氏の「砂川型式を武蔵野台地を中心とした小地域に限定しようとする方向性である。（中略）資料数の多い関東地方の石器群にとらわれすぎている点である。他地域のなかに武蔵野台地と同じ特徴が認められた場合、それをどのように位置付けるのか」（田中 1997）と言う批判が出そうであるが、筆者の意図は、固定的な区分をおこなうことが目的ではなく、分析対象（要素／視点）によって多重的な区分線が引けるのはなぜかということの検討であり、平面的に検討されてきた各要素を立体的に配置するための模索である。また、遊動生活というキーワードによって、広範囲な移動を繰り返していたとするイメージと、実際の報告書作成過程で感じる印象の違いを明確にすることであった。

次に、遺跡の規模を石器集中の数と石器の総点数をみてきたが、石器集中の区分は当然主観が入り各報告者によって区分の基準が変わる可能性がある。また、石器の総点数も黒耀石製の石器製作の場所を調査すると、微細な碎片が多量に検出され、まとまった資料のように思えてしまうが、ナイフ形石器の点数と合わせることで、一つの傾向として捉えることが可能であると考え。また、礫群の有無とその数が予想以上に地域によって偏在があることが明らかになった。

大宮台地は灰原遺跡を除くと、石器集中及び石器点数も小規模のものが多く、礫群が伴う遺跡は無かった。入間台地と加治丘陵は、西久保遺跡で石器集中、石器総数共に突出し中心的な遺跡である以外は、石器集中1ヶ所、石器点数も2～300点程度の遺跡が多い。しかし、ナイフ形石器に関しては各遺跡で10点以上出土しており、大宮台地と比べると規模のわりに充実した内容といえる。入間台地も礫群は検出されていない。武蔵野台地北西部、狭山丘陵付近は入間台地／加治丘陵と合わせて【砂川期：砂川型】とした地域であるが、入間川を渡ることによって石器集中、石器点数共に多くなり、礫群も小規模であるが伴うようになる。

武蔵野台地は、遺跡分布から幾つかの小グループがみられる。その中でも石神井川中流域と神田

川源流の井の頭池周辺は一つのエリアとして密集部分がみられる。遺跡も石器集中、石器点数とも多く検出されており礫群を伴う。また、尖頭器が出土した葛原遺跡では石器集中を上回る礫群が検出されている。野川上流域の目影山遺跡ブロックⅡ群も石器集中を上回る礫群検出されている。

相模野台地は石器集中、礫群、石器総点数、ナイフ形石器等で武蔵野台地を上回る規模の遺跡が多くみられる。また、尖頭器が各遺跡で共存する点も異なっている。丹沢山地の宮ヶ瀬遺跡群では、礫群以外に配石、炉跡が伴い、台地部の遺跡と異なる様相を呈している。

石器石材の嗜好性は、大宮台地は遺跡の規模が小さいためか一つの石材に偏る傾向がある。しかし、石材の種類は武蔵野台地と共通点も多い。人間台地はチャートを主石材に黒曜石が殆どみることがない、いわゆる在地石材のみで構成されている。一方、武蔵野台地北西部では人間台地と共通する傾向であるが、黒曜石が若干増える傾向にある。礫群の有無と合わせて、より小地域での分析が求められるかもしれない。武蔵野台地東部は幾つかのエリアに分かれるが、多様な石材が用いられている点は共通する。また、遠隔地石材として黒曜石、硬/注質頁岩が使われており注意される。地理的には人間川流域のほうが原産地に近いと思われるが、当該地域で在地石材を嗜好するのに対し、武蔵野台地東部の遺跡では、なぜ遠隔地石材が用いられているのであろうか、それぞれの地域の遺跡群で異なった石材獲得のチャンネルがあると考えられる。

相模野台地は、相模川中流域の大和市周辺の密集区でチャートを主に用いる遺跡と、凝灰岩を主に用いる遺跡が混在している。より上流域に近い遺跡はチャート、相模川の支流及びや下流域に分布する遺跡に凝灰岩が多く用いられる傾向があるが、遺跡分布をみる限り原因となる有意な要因はみられず、個別の遺跡分析によって検討する必要がある。また、主な石材が異なる以外は、黒曜石が一定量使われている点と、遺跡の規模、尖頭器の有無等に違いはあまりみられないようである。

相模野台地と人間川流域は、主な石材が異なっており遺跡の規模、礫群、石器総点数等々で対照的な地域であるが、在地石材を多用する点では共通している。武蔵野台地は遺跡の規模、礫群の有無等は相模野台地に近いが、尖頭器の有無は人間川流域と同じく伴わない遺跡が多い。しかし、石器石材の嗜好は相模野台地/人間川流域が在地石材を多用するのに対し、いわゆる遠隔地石材が多く用いられている点は大きく異なっている。

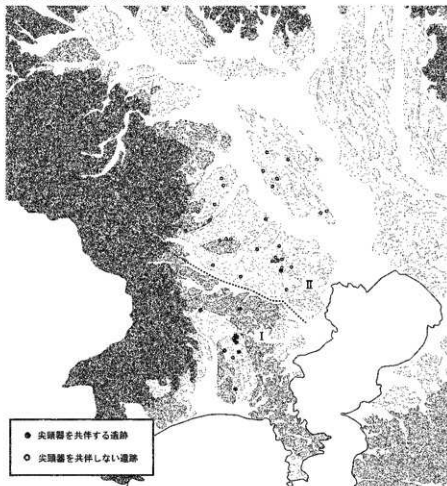
以上検討した地域の周辺に、その地域と異なった傾向を示す遺跡が点在している。黒曜石を多用する富士見一丁目遺跡、南鍛冶山遺跡と宮ヶ瀬遺跡群については改めて検討したい。

3. 尖頭器

砂川遺跡第2次調査の報告書の中で、月見野遺跡群と野川遺跡の調査の成果をもとに確立した相模野編年と武蔵野編年のなかに、砂川遺跡が位置付けられ武蔵野Ⅱb期と相模野第Ⅳ期とされた。当該期は「いずれも槍先形尖頭器と先刃式の搔器をともなう。これに対して砂川遺跡では、A地点・F地点とも槍先形尖頭器と搔器の確実な出土例はみられなかった」ことに対する解釈として「たまたまA・F両地点の発掘区域で出土しなかっただけ」又は「槍先形尖頭器や搔器を製作したりあるいは使用したりする作業が行われなかった」と理解している(鈴木 1974)。特に砂川遺跡の周辺表採資料に尖頭器が多くみつまっていることも、前者の考えを補強している。

また、尖頭石器器群の研究の視点から、尖頭器の出現の問題を追及していた白石氏は、岩宿Ⅱ期の角錐状石器から尖頭器への変遷を想定し論理展開をおこなっており、砂川期に尖頭器が伴うことを補強している。一方、ナイフ形石器に比べあまりに少ない尖頭器をどの様に解釈すべきかについては、本郷川遺跡の報告(宮塚、矢島、鈴木 1974)の中で「構造外的存在」と位置付けるなど、白石氏との間に意見の違いもみられる(白石 1999)。

シンポジウム『ナイフ形石器文化終末期の問題』のコメント「尖頭器の共存について」(田中 1980)で田中氏は、尖頭器が伴件するとしている遺跡において、それぞれ異なるレベルで議論されているとし、状況の属性に関して条件を与えている。条件1. いわゆる「遺跡の範囲で認められる場合。条件2. ほぼ同一層位の範囲からひとつの面的まとまりを持って出土した場合。条件3. 条件2によって抽出された複数石器の相互が同一石質で成り立っている場合。条件4. 条件3によって抽出された複数の石器の相互がさらに同一の母岩や相互の整合関係を持って結び付けられている場合の4つの段階の条件を設定し、条件2を満たす遺跡を分析し、砂川期に尖頭器が伴うのか疑問を提示している。しかし、ここで対象とされた遺跡が武蔵野台地の遺跡に限られており、相模野台地をフィールドとしている研究者から、多くの批判が出された。



第3図 尖頭器

諏訪問・堤氏氏は深見諏訪山遺跡の再検討（諏訪問・堤 1985）の中で「最近の調査事例である下鶴岡長堀第Ⅲ文化層では槍先形尖頭器とナイフ形石器が同一の個体によって製作されている（中略）槍先形尖頭器については、その存在が石器組成から強引に排除されるのではなく、なぜ少量ながらも共存するのが議論されるべき」としている。この論文で、武蔵野台地と相模野台地の状況の違い、砂川期の設定問題に対する指摘があり、尖頭器の共存に関しては、田中氏の条件Ⅰを満たす遺跡の存在で、一応の決着をみたとし、改めてナイフ形石器に比べ尖頭器が少量であることの解釈の必要性が述べられている。

その後、増加した相模野台地の良好な資料によって、砂川期に尖頭器が存在することを前提に、中部高地の生産地遺跡と相模野台地の消費地遺跡といったダイナミックな論理展開がなされ、武蔵野台地の尖頭器を伴わない遺跡もその中で解釈されていった（関口 1992、白石 1997、島田 1997）。

しかし、大宮台地及び武蔵野台地北西部において砂川期の遺跡に明確に尖頭器が伴う例は無く、筆者は田中氏の見解を支持する立場で、当該地域の遺跡の整理・報告書の作成に関わってきた。そこで、単純な在る無し論争ではなく、また、共存することを前提とした“もつ遺跡”と“もたない遺跡”の遺跡構造論的分析でもない視点でみると、はたして関東地方（特に南関東地方）は“同じ”であるのだろうかという素朴な疑問にぶつかった。諏訪問・堤氏も「武蔵野台地では当該期石器群に槍先形尖頭器の共存は明らかでないものが多い」と述べているが、相模野台地／多摩丘陵と武蔵野台地／入間台地／大宮台地を遺跡レベル、遺物レベルで改めて検討する。

I：相模野台地／多摩丘陵

相模野台地及び多摩丘陵の砂川期の遺跡には、尖頭器が多く報告されている。今回分析対象とした14遺跡、16地点／文化層で尖頭器の検出されなかった遺跡は、宮ヶ瀬遺跡群の中原遺跡、上原遺跡、サザランケ遺跡、長堀南遺跡第Ⅴ文化層、南鍛冶山遺跡、福田内二ノ区遺跡の6遺跡である。一方、尖頭器及びその未製品が検出された遺跡は、橋本遺跡、下森鹿島遺跡、中村遺跡C区、下鶴岡長堀遺跡、長堀北遺跡、長堀南遺跡第Ⅳ文化層、深見諏訪山遺跡、栗原中丸遺跡、向遺跡で中村遺跡D～F地点からは尖頭器の未製品が検出されている。尖頭器が共存した遺跡は10遺跡で、検出されていない遺跡との比は10対6となり、尖頭器を共存する遺跡のほうが多い。しかし、尖頭器とナイフ形石器の比率の差は大きく、ナイフ形石器1,227点に対し、尖頭器は33点（内未製品と思われるもの、7点）とその割合は3%である。

〔検出された尖頭器〕

橋本遺跡第Ⅲ文化層から尖頭器2点が検出されている。出土状況は、遺物分布図を見る限り2点とも同一グリッドから出土しており、石器集中部を形成している中に位置している。1は黒曜石製の両面加工の尖頭器で、上半部が欠損しており、種別判別の有無は不明である。2は珪岩製の尖頭器で片面・周縁調整が施されている。報告書の実測図をみると、ナイフ形石器と分類されているものの中に、尖頭器と分類してもよさそうなもの（報文4-19-257）が見受けられる。第Ⅱ文化層は涙滴形のナイフ形石器を主体とする石器群で、複数の尖頭器が検出されている。直接種別判別を有する尖頭器はみられないが、黒曜石製の削片があり存在を伺わせる。

第2表 相模野台地/多摩丘陵の尖頭器一覽表

No	遺跡名	石材	残存状況	形態	長さ	加工	幅状測厚	備考	報文図版	
36	橋本遺跡	1	黒曜石	上半部欠	木葉形	—	両面調整	不明	4-19-739	
		2	珪岩		柳葉形	3.2	片面、周縁調整	無	4-19-18	
37	下森鹿島遺跡	3	チャート		広葉形	6.0	両面調整	有	104図-1	
		4	玄武岩		木葉形	5.1	周縁調整	無	104図-2	
		5	チャート		木葉形	4.1	両面調整	無	104図-3	
		6	黒曜石		木葉形	4.1	両面調整	無	104図-4	
		7	チャート		木葉形	4.2	片面、周縁調整	無	104図-5	
38	中村遺跡(C区)	8	黒曜石		木葉形	6.6	両面調整	有	D-F区は尖頭器の未製品のみ、2点出している。	142図-135
		9	樹状凝灰岩		木葉形	4.3	片面、周縁調整	無		142図-136
		10	樹状凝灰岩	先端欠	木葉形	4.4	片面、周縁調整	無		142図-137
		11	チャート		未製品	5.9	両面調整			142図-138
		12	チャート	下半部欠	未製品	—	両面調整			142図-139
39	中村遺跡(D-F区)	13	粘板岩		未製品	—			233図-86	
		14	粘板岩		未製品	4.3			233図-87	
40	下船岡長堀遺跡	15	黒曜石		木葉形	3.7	両面調整	無	17/19/20は調整が粗く未製品の可能性がある。他に未製品2点検出されている。	113図-1
		16	粘板岩	下半分欠	木葉形	—	両面調整	無		113図-2
		17	チャート	下半部欠		—	片面、周縁調整	無		113図-3
		18	チャート	2点接合	木葉形	6.2	両面、周縁調整	無		113図-4
		19	黒曜石		未製品?	5.1	片面、周縁調整			113図-5
		20	黒曜石	先端欠	木葉形	4.6	片面、周縁調整	無		113図-6
		21	チャート	下半部欠	未製品?	—	片面			114図-7
		22	チャート		未製品?	5.2				114図-8
41	長堀北遺跡	23	チャート		木葉形	5.4	両面調整	有		99図-54
		24	チャート	上半部欠	木葉形	—	両面調整	不明		99図-55
42	長堀南遺跡(IV文)	25	安山岩	先端欠	木葉形	5.1	両面調整	有	第V文化層では尖頭器無し。	96図-1
44	深見諏訪山遺跡	26	黒曜石	2点接合	木葉形	6.2	両面加工	有	端部のみが5点、削片も出土している。	66図-1/2
		27	黒曜石	2点接合	木葉形	5.6	両面加工	有		66図-3/4
		28	黒曜石		木葉形	5.8	両面加工	無	石器石材は全て黒曜石製。	66図-5
		29	黒曜石		木葉形	4.3	両面加工	無		66図-6
45	栗原中丸遺跡	30	黒曜石	上半部欠	木葉形	—	両面調整	無		90図-1
		31	粘板岩?	上半部欠	木葉形	—	片面調整	有		90図-2
48	向遺跡	32	黒曜石	基部のみ	不明	—	両面加工	不明		53図67
		33	黒曜石	基部のみ	不明	—	両面加工	不明		53図68

下森鹿島遺跡第Ⅳ文化層から、尖頭器5点が検出されている。尖頭器は各石器集中に分散している。石器石材はチャートを主体に玄武岩、黒曜石が用いられており、ナイフ形石器の石材組成と共通する。3は左側縁に幅状測厚がみられるが全体に作りは粗く、この状態で完成品なのか、未製品なのか疑問である。5と6は黒曜石とチャート製であるが、大きさが共に4.1cmで先端を作り出す点が共通する。7は緩長剥片を素材に打面を基端面に残し周縁からの調整加工が施されている。中

村遺跡C区の9と似ている。

中村遺跡C区第V文化層は、未製品も含めて5点検出されている。出土状況は、複数の石器集中から出土しているが、「やや限定された状態で分布」(伊藤 1987)しているとされている。8は槌状剥離を有する黒曜石製の両面調整尖頭器である。9と10は縦長剥片を素材に打面を基面に残す、片面・周縁調整の尖頭器である。10は上半部のみ調整加工が施されており下半部は調整加工を意図していたのか不明である。他に未製品とも思われる両面加工の石器が出土している。ナイフ形石器と尖頭器の伴同問題に関連して、個別別分類を徹底した成果として、ナイフ形石器と尖頭器が同一個体に存在することを下鶴岡長堀遺跡に続いて指摘されている。

中村遺跡D-F区第V文化層からは、尖頭器の未製品と思われる石器が2点出土している。

下鶴岡長堀遺跡第III文化層から、尖頭器8点出土している。出土状況は複数の石器集中でナイフ形石器と共に検出されている。尖頭器に用いられている石材は、チャートと黒曜石が主体をなし、全体の石材組成及びナイフ形石器で主体を占める凝灰岩と粘板岩の比率が極端に低い。13は黒曜石製の両面調整尖頭器で小形木葉形を呈している、2点が接合しほぼ完形である。先端部が作り出したかのように成っているが、槌状剥離はみられない。18・20は両面又は片面周縁調整の尖頭器である。大きさは18が6.2cm、20は先端が欠損しており現存では4.6cmであるが、想定では5.5cm程度になると思われ、18、20は形状が近似している。19は調整加工が部分的で21・22と共に未製品の可能性が高いと思われる。個別別分類によって、ナイフ形石器と尖頭器の個体の共有関係が始めて指摘された。

長堀北遺跡IV文化層からは、槌状剥離を有する尖頭器1点と両面調整の尖頭器の下半部が検出されている。29の槌状剥離を有する尖頭器はチャート製の半両面調整で、外形は槌状剥離のある左側面が緩い弧状を呈し右側縁は中央部でやや下部で屈曲し、左右非対称である。中村遺跡C区の16と比べると両面調整と半両面調整と異なり、大きさが6.6cmに対し5.4cmと小振りになるが外形的には近似している。30は上半部を欠くため槌状剥離の有無は不明である。

長堀南遺跡第IV文化層から、槌状剥離を有する尖頭器1点が検出された。石材はチャートが用いられており、外形は細身である。

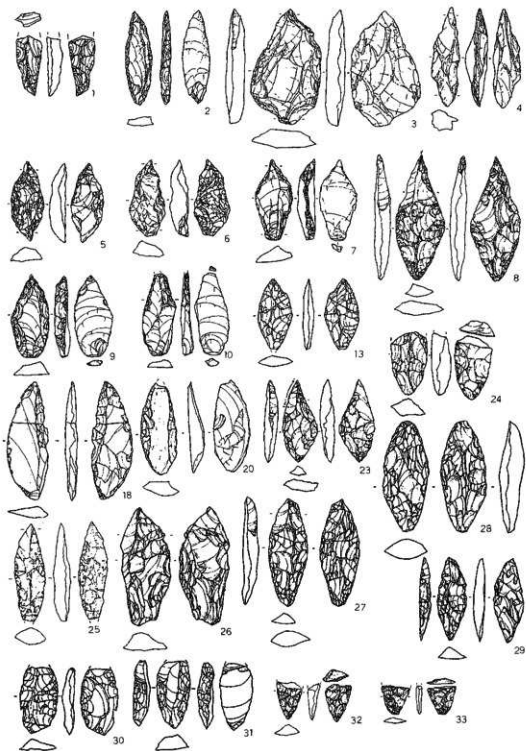
深見諏訪山遺跡第IV文化層では、ナイフ形石器22点に対し尖頭器が7点検出されている、尖頭器が石器に占める割合は22%と他の遺跡と比べて突出している。また、削片等の尖頭器の製作及びメンテナンスに関わる石器が出土しており、ナイフ形石器を主体とする遺跡ではめずらしい。26、27、29の尖頭器は黒曜石製の両面調整で槌状剥離が施されている。28には槌状剥離がみられないが、先端を丸く整形されており、槌状剥離が施される前段階の状態である(国武 2001)。

栗原中丸遺跡第V文化層から尖頭器2点検出されている。出土状況は、離れた2つの石器集中からそれぞれ1点検出されている。2点とも先端部を欠損している。石材は黒曜石製と粘板岩製で、槌状剥離は粘板岩製のものにみられる。

向遺跡から尖頭器の基部破片2点出土しているが、全体の形状は不明である。

以上、相模野台地の砂川期の尖頭器をみたが、気づいた点を整理しておく。

相模野台地の砂川期の遺跡では、ナイフ形石器に比べて尖頭器点数は少なく、製作及びメンテナ



第4図 相模野台地/多摩丘陵出土の矢頭器

ンスの痕跡がみられない遺跡が多い。その中で例外的存在である深見諏訪山遺跡は、ナイフ形石器22点に対し尖頭器が7点とまとまり、削片等の製作痕跡が明確である。

次に、各遺跡から出土した尖頭器の形態をみると、桶状剥離を有する尖頭器と、周縁調整の尖頭器、両面調整の尖頭器がみられ、それぞれが組み合わさるかたちで組成している。石器石材は、黒曜石が主体を占めているというイメージであったが、思ったよりチャート等が多く、また桶状剥離を有する尖頭器もチャート、安山岩等が用いられている。橋本遺跡第Ⅱ文化層から、黒曜石製の削片が出土しており、桶状剥離を有する尖頭器が当該期だけに限定されるだけでなく時期幅が想定される(栗原 2000、高立 2001)。

【尖頭器を共伴しない遺跡】

尖頭器が出土した遺跡は相模川中流域、特に大和市周辺に多くまとまるのに対し、その周辺に位置する南鍛冶山遺跡と宮ヶ瀬遺跡群からは尖頭器の共伴はみられない。また、大和市周辺でも福田内二ノ区遺跡は第Ⅰ文化層の涙滴形ナイフ形石器に伴って尖頭器が複数出土しているが、砂川期に相当する第Ⅱ文化層中からは尖頭器の出土はみない。他の遺跡と比べ、雑群の伴わない点は注意されるが、石材組成等は当該地域の他遺跡と共通しており、たまたま、尖頭器が伴わなかっただけでも考えられるが、ナイフ形石器等の検討が必要である。

南鍛冶山遺跡は石器集中1ヶ所と資料的制約があるが、石器の総点数1084点、ナイフ形石器81点と資料的に充実しており、用いられている石材の全てが黒曜石と特徴的である。本遺跡に近い資料として本蓼川遺跡が挙げられるが、本蓼川遺跡には尖頭器が伴っており、今後検討が必要である。

宮ヶ瀬遺跡群の中原遺跡、上原遺跡、サザランケ遺跡の3遺跡からは、中原遺跡の尖頭器製作過程の調整剥片と思われる1点を除くと、尖頭器の共伴はみられない。上記の項でも述べたが、石器石材で、立地的特異性から凝灰岩の使用頻度が高いのは想定できるが、遠隔石材の黒曜石がどの遺跡でも一定量利用されており、また、伊豆・箱根付近の黒色ガラス質安山岩が中原遺跡で集中的に利用されている中で、チャートが殆ど利用されていない。距離的に近い、橋本遺跡等の相模川流域上流域の遺跡は、尖頭器が共伴する場合が多く、主石材にチャートが用いられている点を考えると注意される。

Ⅱ：武蔵野台地／入間台地／大宮台地

【武蔵野台地】

武蔵野台地で尖頭器が伴う遺跡は、石神井川中流域の武蔵野関遺跡、葛原遺跡B地点第Ⅰ／Ⅱ文化層、武蔵関北遺跡第Ⅱ文化層と神田川の水源地に位置する井の頭池遺跡群の御殿山遺跡Ⅳ層上部と比較的接近した地域にまとまる傾向がみられる。

武蔵関遺跡は、Ⅲ層下部からⅣ層上面にかけて石器が出土している。尖頭器の出土状況は、調査区の北東部の石器集中にまとまっており、人形両面調整尖頭器は下半部を欠き尚且つ3つに破損した状態で近接して検出されている。Ⅰは木葉形の両面調整尖頭器で、両端を欠損するため桶状剥離の有無は不明である。大形両面調整の尖頭器は、本遺跡の石材組成がホルンフェルスを主に、チャートと黒曜石が少量に用いられているのに対し、頁岩と異質である。また、砂川期にこのような大

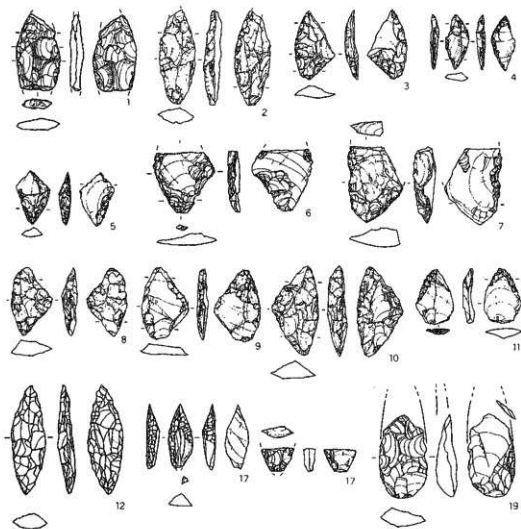
第3表 武蔵野台地の尖頭器一覽表

No	遺跡名	石材	残存状況	形態	長さ	加工	縁状調整	備考	綴文図版
21	武蔵岡遺跡	ホルンフェルス	両端欠	木葉形	—	両面調整	無		18図-13
23	葛原遺跡	安山岩	先端欠	木葉形	—	両面調整	無	2~7が第Ⅰ文化層、8~11が第Ⅱ文化層	36図-1
		チャート		左右非対称	3.7	片面調整	有		36図-2
		黒燧石		木葉形	3.0	周縁調整	有		36図-3
		チャート		左右非対称	2.9	片面調整	無		36図-5
		珪質頁岩	上半分欠	左右非対称	—	片面調整	不明		36図-4
		チャート	上半分欠	未製品?	—	片面調整			36図-6
		チャート		左右非対称	3.7	両面調整	無		60図-94
		チャート		左右非対称	3.9	片面、周縁調整	無		60図-95
		頁岩		左右非対称	4.9	両面調整	有		60図-96
		チャート		木葉形	3.0	周縁調整	無		60図-99
24	武蔵岡北遺跡	安山岩		木葉形	7.5	両面調整	無	12~14は尖頭器?	21図-25
		黒燧石				周縁調整	無		21図-26
		黒燧石				周縁調整	無		21図-27
		黒燧石				周縁調整	無		21図-28
		黒色頁岩	上半分欠			片面調整	無		21図-29
27	御殿山遺跡	黒燧石	先端欠	木葉形	3.5	片面調整	無		50図-1
		黒燧石	基部のみ		—		不明		50図-2
30	日陰山遺跡	チャート	上半分欠	木葉形	—	片面調整	不明		65図-87

形両面調整尖頭器の出土例は見受けられず、層位的にⅢ層のソフトロームからⅣ層のハードロームと、砂川期からより新しい時期の石器が混在したときに区分が難しいと思われる。

葛原遺跡B地点第Ⅰ/Ⅱ文化層からは、ナイフ形石器81点に対し尖頭器が10点出土し、器種組成に占める割合は10%（全体では1%）と高い。出土状況は、やや限定された石器集中にまとも、ナイフ形石器が集中する石器集中とはわかる傾向がみられるが、あえて分離する根拠もないようである。2は先端を欠くが、安山岩製で両面調整の左右対称の尖頭器である。3は片面調整で右側縁の桶状剥離が施されている。外形は右側縁が弧状を呈し、左側縁が張り出すように屈曲する左右非対称で5・6?・8・9・10と共通する。4は唯一黒燧石製の尖頭器で、周縁調整の左右対称である。左側に桶状剥離がみられるが「剥離面と腹面の角度が他の尖頭器より大きい」（前田・廣田 1987）ことから衝撃剥離の可能性も想定される。8と10は両面調整で10は左側縁に桶状剥離が施されている。11は縦長剥片の打面を基部に残し、上半部の周辺調整によって先端を作り出している。やや幅広であるが、下森鹿島遺跡の7、中村遺跡C区の10と共通する。尖頭器に用いられている石材は、チャートを主に頁岩等がみられる。

武蔵岡北遺跡第Ⅱ文化層は尖頭器5点が出土している。12の両面調整のもの、周縁調整、片面調整がみられるが、黒燧石製のものは尖頭器なのか報告書からではよくわからない。



第5図 武蔵野台地出土の尖頭器

御殿山遺跡Ⅳ層上部は尖頭器2点が出土している。出土状況は広範囲に遺物が密集する地点からの検出である。17は片面調整、18は基部破片のため詳細は不明である。

日影山遺跡第Ⅱ文化層では、ナイフ形石器の石器集中から離れた地点で、尖頭器を主体とする石器集中が1ヶ所検出されている。黒曜石製の槓状剥離を有する尖頭器が含まれるが、ブロックⅠ群に伴うのかブロックⅡ群に伴うのは、あるいはそれより新しい時期なのかは定かでない。ブロックⅡ群の石器集中から検出された尖頭器19は、チャート製の木葉形半面調整である。槓状剥離に関しては欠損しているため不明である。

上記で取り上げた遺跡以外にも、幾つかの報告で尖頭器の共伴が指摘されている。打越遺跡第2地点は石器集中よりやや離れて黒曜石製の槓状剥離を有する尖頭器が検出されている、報文にとると縄文時代の土壌底部からの検出で、共伴とは考えづらい。吉祥寺南町1丁目遺跡E地点は、「明確な尖頭器は組成しない」としながら実測図に尖頭器と分類させている石器が2点掲載されている

が、小破片ため定かではない。

【入間川流域】

入間川を挟んで入間台地と武蔵野台地の、約5kmの範囲に砂川期の遺跡がまとまっている。本地域で砂川期に尖頭器が伴って例はなく、僅かに鶴ヶ丘遺跡C区で砂川期石器群と尖頭器が報告されているが、打越遺跡第2地点と同様、出土状況から明確に分離される。

【大宮台地】

大宮台地の砂川期石器群の出土層位は、殆どがソフトローム層中である。その為、砂川期石器群と尖頭器を層位的に区分することは不可能である。今回分析した大宮台地の砂川期の遺跡で尖頭器が出土しているのは、在家遺跡と臥原遺跡である。在家遺跡に関しては、複数時期の石器が混在している可能性があり、ここでは検討対象としない。臥原遺跡は、砂川期の石器集中9ヶ所と尖頭器石器群の集中1ヶ所が検出されている。考察編の中で石器石材、母岩別分類、接合関係から砂川期の石器集中9ヶ所は緊密な関連性がみられたのに対し、尖頭器石器群の集中は他の石器集中と没交渉的で、分離されると考えた。この考えは現在も基本的には変わっていないが、臥原遺跡の尖頭器の外形は、寸詰まりで肩が張り出す形状で葛原遺跡B地点の尖頭器と共通する部分もあり、今後の検討課題としたい。

【武蔵野台地／入間台地／大宮台地の楯状剥離を有する尖頭器】

武蔵野台地／入間台地／大宮台地の状況を見てきたが、当該地域では尖頭器の共伴が指摘されている遺跡が、石神井川中流域と井の頭池周辺と比較的限定された地域にまとまっている。また、仮に大宮台地の臥原遺跡の尖頭器が共伴だとすると、直線的に近距離に並ぶことになり、下総台地との関連性も注目されるが、なお慎重な検討が必要であると考ええる。

楯状剥離を有する尖頭器は、葛原遺跡B地点を除くとまとまった資料は殆どない。また、相模野台地の楯状剥離を有する尖頭器は左右対称形になるものが多いのに対し、葛原遺跡は寸詰まりで肩が張る形状でかなり異なっており。前者を男女倉型、後者を東内野型と区分する場合が多いが、特に後者は下総台地の東内野型尖頭器石器群とのギャップがあるように見受けられる。ここではあくまで、楯状剥離を有する尖頭器と解釈しておく。その他の尖頭器に関しては両面調整、周縁調整がみられる、葛原遺跡B地点の11と下森鹿島遺跡の7、中村遺跡C区の9・10に共通する要素があり、部分的には似た様相もみられる。

一方、武蔵野台地／大宮台地では、砂川期石器群とは共伴しないかたちで、黒曜石製の楯状剥離を有する尖頭器の製作又はメンテナンスと関わる遺跡が報告されている。西武蔵野遺跡は石器集中8ヶ所が環状に並び、それを囲むように11基の礫群を伴っている。楯状剥離を有する尖頭器は1点であるが、刮片、尖頭器の調整剥片が多量に出土しており、尖頭器の製作が集中的におこなわれたことが想定される。また、縦長剥片を素材とした先刃掻器、各形態の彫器が出土している。ナイフ形石器は2点検出されたが、尖頭器石器群と黒曜石の強い関連性がみられる中で、2点とも貞岩製で、関連する剥片類は非常に少なく、ナイフ形石器が“構造外的存在”であるいえる。

竹橋門遺跡は西武蔵野遺跡よりは規模が小さいが、肩の張り出す左右非対称の楯状剥離を有する尖頭器と刮片がまとめて検出されている。ナイフ形石器は出土していない。

花ノ木遺跡では槌状剥離を有する尖頭器の未製品と思われる石器2点と、多量の碎片と削片、削器が出土している。比較的近接する遺跡として、城山南遺跡から槌状剥離を有する尖頭器と削片が出土している。また、丸山東遺跡では砂川期より下層の文化層から槌状剥離を有する尖頭器がまともって出土しているが、なお検討を有するかもしれない。

下柳沢遺跡第3文化層から破損した槌状剥離を有する尖頭器の接合資料が検出されており、調整削片等もみられることから、製作工程等の分析に貴重な資料となっている。ナイフ形石器が3点伴うが、砂川期のナイフ形石器とは異なっている。

以上、丸山東遺跡を除く5遺跡は、黒曜石製の槌状剥離を有する尖頭器と共に削片等が出土しており、製作又はメンテナンスと深く関わる遺跡と考えられるが、ナイフ形石器は伴わないか、もしくは少量のみで、ナイフ形石器の圃からの編年の位置付けを難しくしている。

古祥寺南町三丁目遺跡B地点は、涙滴形ナイフ形石器がまともっており、それに伴って槌状剥離を有する尖頭器2点を主体とした尖頭器石器群が検出されている。ナイフ形石器の形態から砂川期直後に位置付けるのが妥当と考えられるが、それによって、他の資料をこの段階に置くことには、なお慎重に検討する必要がある。

大宮台地は、中川貝塚などで単独出土のものが僅かにみられるが、まともった資料は戸崎前遺跡だけである。戸崎前遺跡からは、尖頭器の破損品と削片、ナイフ形石器が出土している。ナイフ形石器は縦長削片を素材に幅広で基端に打面を残し、基部がやや丸くなる形状で終末期のナイフ形石器に含まれると思われる。

【砂川期前後段階の尖頭器】

上記で武蔵野台地／大宮台地／大宮台地の槌状剥離を有する尖頭器について検討し、黒曜石製の槌状剥離を有する尖頭器の多くが、砂川期以降の可能性が高いことをみてきたが、相模野台地では近年、砂川期よりも古い段階の遺跡から、尖頭器が検出されており、発生の問題を含めて注目されてきている。

まず、岩宿Ⅱ期の後半に相当する、下丸沢山谷遺跡第Ⅳ文化層、高座渋谷団地遺跡Ⅴ文化層から尖頭器状石器が出土している。2遺跡とも黒曜石以外の石材で作られており、半両面調整、両面調整のセットで、半両面調整の尖頭器には片側縁に面を残し、槌状剥離を有する尖頭器の祖形のようにも見える。同一段階と考えられる大宮台地と武蔵野台地の遺跡は、新屋敷遺跡C・D区、明花向遺跡C区、室ヶ谷戸遺跡第33次調査、比丘尼橋遺跡B地点Ⅳ層と最近資料が充実してきた。その中で、尖頭器と関連すると思われる石器は、比丘尼橋遺跡B地点の両面調整石器だけで、他の遺跡からは尖頭器石器群の痕跡はみられない。

砂川期の直前もしくは古段階の遺跡として、大和市No210遺跡第Ⅱ文化層と用田バイパス鳥居前遺跡の資料がある。大和市No210遺跡と用田バイパス鳥居前遺跡が共に安山岩製の槌状剥離を有する尖頭器の製作遺跡であるとして、尖頭器の出現期問題と関連して積極的に評価する考え（栗原2000）もあるが、資料的制約もあり明確にはされていない。しかし、尖頭器の出現期／受容期の問題を考えると重要なヒントになるかもしれない。

以上、砂川期の尖頭器に関して検討をおこなってきたが、最後に若干整理しておく。

現在の多摩川を挟んで、相模野台地／多摩丘陵の殆どの遺跡で尖頭器が共存している。一方で武蔵野台地／入間台地／大宮台地では、多くの遺跡で尖頭器の明確な共存はみられない。また、相模野台地と武蔵野台地の尖頭器をみると、周辺調整の尖頭器の一部は近似するが、楕状剥離を有する尖頭器の形態は異にしている。両地域における尖頭器の受容のしかたが均一でなかったと思われる。

武蔵野台地／大宮台地は、黒曜石製の楕状剥離を有する尖頭器の多くが砂川期よりも新しい、涙滴形ナイフ形石器に伴う可能性が高い。しかし、尖頭器の製作に関わるとと思われる遺跡からナイフ形石器の良好な出土がないため、ナイフ形石器の製作と尖頭器の製作が場を違えているのか、遺跡の規模の縮小によってそのようにみえてしまうのか、複眼的な検討がなお必要である。

相模野台地においても、まだ資料は少ないが尖頭器の出現期／受容期が砂川期より遅る可能性が指摘されている。尖頭器の問題に関しては、一層複雑な様子を呈している。

4. おわりに

2000年の「砂川」シンポジウムで言い足りなかったことを、『石器文化研究』10号に書く予定であったが、11月5日の衝撃によって、書くための準備を整えることができず、シンポジウム及びそれ以降に発表された論文への感想を、簡単に述べるだけになってしまった。

シンポジウム以降、特に『石器文化研究』10号の誌上で多くの方からご批判をいただいた。シンポジウムの時に言い足りなかったこと、批判に対しては勉強不足を率直に認めながら、「砂川」とどのように向き合うべきかを考え、改めて基礎的検討の必要性を感じた。

本稿を書き始める段階で、発表要旨を整理しなおせば簡単にすむと思いき、ナイフ形石器の大きさの検討を少しおこなおうと考えていた。しかし、いざ始めると簡単には進まず、やらなければならないことの多さに愕然としてしまった。筆者の力量で、これら多くの問題に対し総合的な検討をくわえることは到底できず、今回は基礎的研究(1)として各地域の遺跡の規模等と、前から気にしていた尖頭器の問題を中心に考えることにした。今後は、基礎的研究の続きとして、砂川期研究で最も重要はテーマである、ナイフ形石器に関し検討をくわえたいと考えている。また、白石氏から批判があった研究史に関しても、今回言及することができなかった。ナイフ形石器の検討と共に考えて行ければと思う。

本稿の執筆に際して、シンポジウムの準備段階から今日まで御教授、御協力を頂いた白石浩之氏、田中英司氏、砂田住弘、諏訪 順氏、伊藤 健氏、亀田直美氏、栗原伸好氏、野口 淳氏、仲田大入氏、国武貞克氏、石器文化研究会の諸氏には心より深謝いたします。

また、亀田直美氏、栗原伸好氏からは文献に関して便宜をはかってもらった、改めて感謝いたします。

註

- 註1 関東地方の地図は、橋本勝雄氏の1998年「関東細石器考」掲載の図版をトレースしたものを使用した。
- 註2 分析対象とした遺跡で前原遺跡は、埼玉県宮代町と東京都小金井市の2遺跡ある。区分するために便宜的に本遺跡を宮代町前原遺跡と呼称する。宮代町前原遺跡は、石器の総数が約800点である。少数の製品と石核を除くと小形の砕片が殆どである。剥片・砕片の個別データが掲載していないが、全体の傾向は頼めると考え数値化し扱った。
- 註3 尖頭器と砂川期石器群が検出されている。その共伴の有無については、報告書で尖頭器は石器集中外となっている。また、報告書掲載実測図を見る限り、ナイフ形石器に関しても複数時期の石器群が混在しているようにみえる。今回の分析では、遺跡全体を扱うことはせずナイフ形石器のみのデータを扱った。また、尖頭器の共伴に関しては留保する。
- 註4 ナイフ形石器の大きさは報告書掲載図面から計測した。
- 註5 ソフトルームからハードルームにかけて砂川期の石器群と尖頭器石器群が出上している。筆者は報告書（考察編）執筆の際、検出された10ヶ所の石器集中を接合及び母岩の共有関係を検討し、砂川期の9ヶ所の石器集中では緊密な関係が見られるのに対し、尖頭器石器群の石器集中は排他的関係にあり。石器石材の嗜好性も異なることから共伴関係は認められないとした。また、実記載の項で、尖頭器石器群の石器集中の中にナイフ形石器と分類された石器があるが、掻・削器としたほうが妥当であると考えている。
- 註6 富士見一丁目遺跡は、砂川期石器群と共に細石器及び岩宿Ⅱ期のナイフ形石器が出上している。堆積層位が薄く石器石材の殆どが黒曜石であるため分離が難しいようであった。また、細石核と上ヶ屋型彫器が同一母岩とされているが、本文中でも指摘されているように、肉眼観察での限界の可能性もあり、細石核のみを分離した。
- 註7 ナイフ形石器の計測等のデータは、田中氏の1997年論文を使用した。また、石材の名称に関しても同じである。
- 註8 城の腰遺跡の本文中、石器石材の項目で緑色黒曜石と記載されている石材があるが、巻頭カラー図版を見る限りチャートと思われる。本文中ではチャートとして扱った。
- 註9 中砂遺跡は北面の緩い斜面に立地する。ルームの境目は北から南に薄くなり、遺物が密集する部分が最も薄くなっている。そのため遺物を層位的に検出することができなかった。また、遺物分布は礫群は単位が明確であるのに対し、石器は広範囲に散漫に広がっており、砂川期と岩宿Ⅱ期の石器群が混在して出上っている。その為、明確に砂川期のナイフ形石器として分離できる資料のみを対象とした。
- 註10 打越遺跡第2地点は、石材に関する記載は部分的であるため、全体の石材組成は不明である。なお、ナイフ形石器の大きさは、報告書図版から計測した。
- 註11 器種の組成表、石材組成表、器種ごとの石材組成表は掲載されているが、個別の石器の「一覧表がないため。各ナイフ形石器の石材は不明である。また、ナイフ形石器の大きさは報告書図版から計測した。
- 註12 第4ブロックから両端を欠損した両面調整の尖頭器と、大形両面調整で薄手の尖頭器の上半部が3点に破損して検出されている。報告書によると2点とも砂川期との共伴が指摘されており、遺物分布図を見る限り、出土状況からは分離が難しい。しかし、小形のものはともあれ大形の尖頭器が砂川期に伴った事例はなく、本稿では検討の対象外とした。
- 註13 ナイフ形石器の大きさは報告書図版から計測した。
- 註14 報告書では当該期を第Ⅰ文化層と第Ⅱ文化層に分けているが、遺物分布が補完的であり、尖頭器の形態があまり変わらないことから、一括して扱った。なお、第Ⅰ文化層とした石器集中からナイフ形石器多数検出さ

れているのに対し、第Ⅱ文化層とされた石器集中からは1点しか出土していない。また、尖頭器の分布が限定的であることから、報告書とは異なる2時期区分も可能かもしれない。

- 註15 石器集中は第Ⅲ層と第Ⅳ層から各1ヶ所検出されているが、石器群の内容等から分離する要素はみられず一括して扱った。また、経緯も同様である。
- 註16 報告書に器種及び石材組成表が掲載されておらず、本文中の各石器の説明が無いので、フロッキーのデータからカウントした。その為、各項目で点数の偏頗がみられるが、全体の傾向は把握できるものとする。なお、本文中で示された、Ⅴ層とⅥ層の石器群と黒曜石第1母岩は対象外とした。
- 註17 第2文化層はⅢb層下部からⅣb層上部にかけて検出されている。遺物の出土層位の上下差と石器集中の分布、石材組成から石器集中をブロック群Ⅰ、Ⅱa、Ⅱb、Ⅱcの4つに分けて検討している。その結果、ブロック群Ⅰをナイフ形石器終末期、ブロック群Ⅱを砂川期としている。しかし、ブロック群Ⅱの中でⅡcとされたブロック21/25号は、他のブロック群と離れており、また槌状刃縁を有する尖頭器と涙滴形ナイフ形石器が検出されるなど、砂川期に含めるかは疑問である。よって、本稿で検討対象としなかった。
- 註18 ナイフ形石器の大きさは、報告書図版から計測した。石材等は石器個別の記載がないため、全体の石材組成表を使った。ナイフ形石器の石材組成は不明とした。
- 註19 ナイフ形石器の大きさは、報告書図版から計測した。石材組成は掲載されていないため不明である。また、ナイフ形石器の石材は、実見の際に筆者の判断によって硬/性質頁岩と判断した。
- 註20 遺物の分布図を見ると複数の石器が集中する地点があるが、報告書では全てグリッド単位で示している。
- 註21 ナイフ形石器の大きさは報告書図版から計測した。
- 註22 ナイフ形石器の大きさは報告書図版から計測した。
- 註23 深見瀬山遺跡のデータは、報告書と諏訪典・堤氏の「神奈川県大和市深見瀬山遺跡第Ⅳ文化層の石器群について」の両方を使った。
- 註24 砂川期の最新のデータは、中原遺跡の炉跡内の炭化物から14C18,950±100B.P.、補正14C18,920±100B.P.、古岡遺跡B1層資料14C19,500±260B.P.というデータがえられている。
- 註25 石材組成で全体の50%以上を占める石質を主石材とし、50%未満で最も多く用いられている石質を主な石材と便宜的に区分した。

参考文献

- 赤石光資 他 1993 『在家遺跡—第1次調査—』上尾市遺跡調査会調査報告書第4集
- 上尾市教育委員会編 1992 『上尾市史 第1巻 資料編1 原始・古代』上尾市
- 麻生順司 1987 『長福南遺跡発掘調査報告書』大和市文化財調査報告書第28集
- 麻生順司 1993 『下森鹿島遺跡発掘調査報告書（先土器時代編）』下森鹿島遺跡発掘調査団
- 荒井幹夫 1976 『第6章 打越遺跡第2地点』『富士見市文化財報告ⅩⅠ』富士見市教育委員会
- 磯野治司 1996 『櫻井山遺跡第2次調査』北本市遺跡調査会報告書第2集
- 伊藤恒彦 他 1987 『中村遺跡』中村遺跡発掘調査団
- 伊藤恒彦 他 1991 『真光寺・広袴遺跡群Ⅴ』鶴川第二地区遺跡調査会
- 伊藤 健 他 1989 『赤山 本文編・第1分冊』川口市遺跡調査会報告第12集
- 伊藤 健 2001 『「砂川」研究における課題と成果』『石器文化研究』10 石器文化研究会 pp175-188
- 伊藤 健・三瓶祐司 2000 『石器組成とブロックの規模からみた「砂川」—石器器経済活動の空間的組織—』『石器文化研究』9 石器文化研究会 pp209-234

- 伊藤博司 1991『城の環道跡・霞台遺跡（第8次）』青柳市教育委員会
- 磯笠 昭・松村明子 他 1976『前原遺跡』国際基督教大学考古学研究所センター
- 磯笠 昭 1980「1 ナイフ形石器の小型化について」『神奈川考古』第8号 pp106-117
- 加藤秀之 他 1987『武蔵野市御殿山遺跡第1地区D地点』御殿山遺跡調査会
- 河野重義 他 1993『武蔵関北遺跡』武蔵関北遺跡調査会
- 窪田恵一 1995『丸山東遺跡1』東京外かく環状道路練馬地区遺跡調査会
- 黒尾和久 他 1986『天祖神社東遺跡』練馬区教育委員会 練馬区遺跡調査会
- 金山喜昭 他 1984『橋本遺跡 先土器時代編』相模原市橋本遺跡調査会
- 岡武貞克 他 1999『日影山遺跡・東山道武蔵路』西国分寺地区遺跡調査会
- 岡武貞克 2000『石材消費からみた領域 ―台地外石材による遺跡連鎖を標識として―』『石器文化研究』9 石器文化研究会 pp235-261
- 岡武貞克 2001『武蔵野台地・大宮台地の面取り尖頭器』『有穂尖頭器の発生・変遷・終焉』予稿集 『千葉県立房総風土記の丘』pp31-52
- 栗島義明 他 1983『多聞寺前遺跡II』多聞寺前遺跡調査会
- 栗原伸好 2000『槍先形尖頭器の変遷 ―相模野台地における「砂川期」石器群の例を中心に―』『石器文化研究』9 石器文化研究会 pp23-31
- 黒坂植二 1998『富士見-丁目遺跡』埼玉県歴史文化財調査事業団報告書第189集
- 小池 聡 1991『長堤北遺跡』大和市文化財調査報告書第39集
- 島田和高 1997『南関東の槍先形尖頭器』『九州旧石器』第3号 九州旧石器研究会 pp99-108
- 島立 桂 2001『相模野台地における有穂尖頭器』『有穂尖頭器の発生・変遷・終焉』予稿集 『千葉県立房総風土記の丘』pp53-62
- 白石浩之 1989『旧石器時代の石槍』東京大学出版会
- 白石浩之 1997『石槍の分布とその標相 ―鶴伏淵離尖頭器から見た集団の動き―』『人間・遺跡・遺物』3 発掘者談話会 pp27-47
- 白石浩之 1999『旧石器研究の論争とその意義 ―石槍の出現を中心として―』『石器文化研究』7 石器文化研究会 pp277-288
- 白石浩之 2001『石槍の研究 ―旧石器時代から縄文時代初期にかけて―』ミューゼ
- 白石浩之 2001『茂呂系ナイフ形石器砂川期の諸問題』『石器文化研究』10 石器文化研究会 pp19-22
- 杉本正文 1984『地蔵坂』杉並区埋蔵文化財報告書第12集
- 鈴木次郎 1984『栗原中丸遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告3
- 鈴木次郎 1996『宮ヶ瀬遺跡群VI サザランケ (No12) 遺跡』かながわ考古学財団調査報告8
- 鈴木次郎 1997『宮ヶ瀬遺跡群X 中原 (No13C) 遺跡』かながわ考古学財団調査報告16
- 鈴木次郎 1997『宮ヶ瀬遺跡群XII 中原 (No13) 遺跡』かながわ考古学財団調査報告18
- 諏訪問 順 他 1984『一般国道246号（大船・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅲ』大和市文化財調査報告書第17集
- 諏訪問 順 他 1983『深見諏訪山遺跡』大和市文化財調査報告書第14集
- 諏訪問 順・堤 隆 1985『神奈川県大和市深見諏訪山遺跡第IV文化層の石器群について』『旧石器考古学』30 旧石器文化談話会 pp85-108
- 関川博幸 1992『槍先形尖頭器の委容過程 ―相模野台地における槍先形尖頭器の製作と廃棄のプロセス―』『研究

石器文化研究会編 2000『石器文化研究8 シンポジウム砂川—その石器群の風域性— 資料集成 南関東各地域の基礎的検討』石器文化研究会

- 田代 治 1993『C-26号遺跡』大宮市遺跡調査会報告第41集
- 田中英司 1979『武蔵野台地Ⅱb期前半の石器群と砂川期の設定について』『神奈川考古』第7号 pp65-74
- 田中英司 1980『2 尖頭器の共存について』『神奈川考古』第8号 pp117-122
- 田中英司 1984『砂川型式間石器群の研究』『考古学雑誌』第69巻 第4号 pp1-33
- 田中英司 1997『川越市鶴ヶ丘遺跡C区の石器群』『研究紀要』第13号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp1-12
- 玉口時雄 他 1989『高橋野遺跡』練馬区遺跡調査会
- 戸沢充嗣 1968『埼玉県砂川遺跡の石器文化』『考古学集刊』第4巻 第1号 pp1-42
- 戸沢充嗣・安森正雄・鈴木次郎・久島國雄 1974『砂川先石器時代遺跡 埼玉県所沢市砂川遺跡の第2次調査』所沢市教育委員会
- 長崎潤一 1991『お伊勢山遺跡の調査 第2部旧石器時代』早稲田大学
- 西井幸雄 1986『中砂遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第60集
- 西井幸雄 1996a『大宮台地における砂川期の様相』『埼玉地域文化の研究』 pp.1-19
- 西井幸雄 1996b『築屋／湖沼／中台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第171集
- 西井幸雄 1996c『坂東山／坂東山西／後B』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第166集
- 西井幸雄 2000『砂川』の空間的枠組みをめぐって『石器文化研究』9 石器文化研究会 pp53-74
- 西井幸雄 2001『砂川』の空間的枠組みについて『石器文化研究』10 石器文化研究会 pp89-94
- 西井幸雄・秋山幸治 1983『前原遺跡』宮代町文化財調査報告書第1集
- 西井幸雄・栗岡 潤 1995『西久保／金井』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第156集
- 西井幸雄・吉田健司 1987『臥原遺跡（考察編）』川口市文化財調査報告書第25集
- 橋本恵美子・窪田恵一 1987『武蔵野遺跡』練馬区遺跡調査会
- 橋本陽雄 1998『関東圏石器考』『千葉県立中央博物館研究報告』第5巻 第2号 千葉県立中央博物館 pp117-135
- 島中俊明・井関文明 他 1999『福田丙二ノ区遺跡』かながわ考古学財団調査報告書68
- 栗田吉一郎・前田 繁 1987『葛原遺跡B地点調査報告書』練馬区遺跡調査会
- 藤波啓吾 他 1983『前戸崎遺跡』上尾市文化財調査報告書第17集
- 三級裕尚 2001『砂川期、石材利用における地域差—ブロック規模と石材組成から見た石材利用の空間領域—』『石器文化研究』10 石器文化研究会 pp143-174
- 宮坂飛人・矢島國雄・鈴木次郎 1974『神奈川県本蓼川遺跡の石器群について』『史館』3
- 武藤康弘・大竹憲昭 他 1981『淵沢北遺跡 第5・6次調査概報』世田谷区教育委員会
- 栗月 芳 1996『南銀治山遺跡発掘調査報告書 第3巻 先土器時代』藤沢市教育委員会
- 山下秀樹 他 1983『久保山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第29集
- 山村貴博 他 1996『吉祥寺南町—丁目遺跡B地点』吉祥寺南町遺跡調査団
- 吉田邦夫 1999『吉岡遺跡群から出土した炭化材の放射性炭素濃度年代』『吉岡遺跡群B 考察編・自然化学分析編』かながわ考古学財団調査報告書49 pp319-336
- 吉田健司 1985『臥原遺跡（先土器・縄文時代編）』川口市文化財調査報告書第23集

研究紀要 第17号

2002

平成14年3月25日 印刷

平成14年3月29日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台4-4-1

電話 0493-39-3955

印刷 関東図書株式会社